

人の主観を探る質的研究能力の涵養について

里見 泰啓¹

要 旨

本稿は、人々の行為や人々が織りなす事象の起因となる主観的意味を解釈する質的研究に焦点を当てた。人々の主観的意味世界を深く解釈し研究の質を高めるには、分析過程において感受概念を用いて研究の方向性を定めること、データ収集の要となる参与観察では研究の基本的目的と問いの下で感受性を豊かにして予断を持たず分析対象者に接すること、漸次構造的な分析過程では予断や価値判断に阻まれないで価値からの自由という姿勢が重要であることを指摘した。また、質的研究の能力の向上には豊かな感受概念の涵養、揺るぎない研究の基本的目的と問いの確立が重要である。質的研究の能力の向上には具体的な分析過程からの示唆、研究成果の応用と評価からの示唆を感受概念の涵養、研究の基本的目的と問い確立に結びつけるのが重要であることも指摘した。

キーワード

感受概念、研究の基本的目的と問い、価値自由、広義の質的研究

はじめに

質的研究は幅広く多様である。質的研究を広く定義すると、数量的な測定や解釈によらず、記述的なデータにより分析する研究ということになる。この広い定義によると、既存の理論を事例調査により検証する研究など、いわゆる定性的研究も質的研究として捉えられると考えられる。本稿は、人の行為や人々の相互行為から生まれる事象の要因となる主観的な意味世界を解釈し理論構築を目指す質的研究を対象に検討を進める。

質的研究による研究成果は、研究結果の内容とともに、その結果を導いた分析方法も評価の対象になる。質的研究には様々なアプローチが存在し分析方法が示されており、特定の分析方法の選択が適切であるか、その方法にそった分析過程が明確であったかどうか問われる。ただ、分析方法の選択が適切で分析が明確であっても、人や事象の解釈が深層に迫っていなければ、研究結果はつまらないものになる。深い解釈は、優れたアプローチが示す方法に則って分析したとしても可能になるわけではない。質的研究により深い解釈

¹ 事業創造大学院大学 教授

をするには相応の能力や研究態度、技量を養う必要がある。本稿では中小企業とその経営者を研究した経験をもとに¹、行為や事象の要因となる主観的な意味の解釈のために重要な能力とその能力の涵養、研究に臨む態度、技量について考えていく²。質的研究は人の行為や社会の事象の未知の要因を探るには有効な方法ではあるが、質的研究に必要な能力や態度が備わっていなければ、質的研究の特性を活かせないと考えられる。

次章では、本稿の考察の前提として人の主観的な意味世界を解釈する質的研究がなぜ必要とされたのか、また質的研究の発展経路を追って質的研究の主旨を明確にしていく。

1 質的研究の本質

1.1 質的研究の必要性

人の主観的な意味世界を解釈しようとする質的研究は、看護学などの医療現場を支える学問領域や心理学や社会学などの領域で生まれ発展してきた。その背景には客観主義に立つ自然科学的研究方法に限界があったことが挙げられる。

Weber (1919) は、社会科学の対象となる事象は人間のさまざまな主観的な行為によって織りなされている。そのような社会的現実には研究者の主観的な価値理念を基にした研究者自身の観点や関心を前提としないかぎり把握し、概念や因果関係を構成できない。つまり研究者は認識前提において価値への自由でなければならないと主張した。

一方、人文科学や社会科学に自然科学的方法を取り入れようとする潮流があった。例えば、社会科学や人文科学に自然科学的方法を取り入れようとした行動科学は、現象を研究対象者の主観的な意味世界に立ち入らず、研究者の価値判断が入り込まない数値データとし、仮説検証型研究法を理想とした。しかし、Weber (1919) の主張の下で、自然科学的方法による研究成果が人の行動や人の結びつきから生まれる社会的現実への適用の限界を示す研究もある。Bons and hartmann (1985) は、客観主義に基づく自然科学的方法を模範とした研究成果が実社会で活かされる場面がきわめて狭いとしている³。Beck and Bons (1989) は、社会科学の研究結果が政治や社会制度の現場で活かされることはほとんどない。用いられる場合は再解釈が加え、バラバラにしたうえのことである。学問が提供するものは制限付き解釈の提案であると指摘している⁴。Flick (2007) は、自然科学的研究を模範とした研究が現実の人間行動や社会事象への応用可能性が低い理由として、自然科学的研究方法の基準を満たそうとするあまり、日常生活で意味のある問題からかけ離れた研究になってしまっているとしている。その一方で、実際の研究の場面では客観主義は部分的にしか実現されていないと指摘している。その理由は、研究者の利害関係や社会文化関係が研究とその結果に影響しており研究の設問や仮説、データの解釈にも影響しているためだとしている。そして、研究者が社会関係に影響を受けているとすれば、心理学や社会科学において客観主義に囚われることなく理論構築を目指す研究方法を築く必要性を説いている。

Flick (2007) は、「客観主義の呪縛を解くと客観的に正しい命題を無批判に受け入れることはできない。人の主観や主体性と状況に結びつきのある主張をすることが社会学的な知の裏づけるとする」というBons and hartmann (1985) の主張から⁵、質的研究が目指すのは「人の主観や主体性と状況に結びつきのある主張」を実証的に根拠ある形で生み出すことだとしている⁶。

1.2 質的研究の歴史と理論的背景

質的研究の発展にはいくつかの道筋があり、発展経路に応じて様々な立場やアプローチがある。Flick (2007) は、グランデッド・セオリー、エスノメソトロジー、会話・ディスコース・ジャンル分析、エスノグラフィーなどを代表的なアプローチとして挙げている⁷。Flick (2007) はアメリカとドイツの質的研究の発展過程を整理している⁸。

ドイツでは19世紀に民族心理学で記述による解釈を用いたのと、社会学のなかでモノグラフ的アプローチと統計的で実証主義的なアプローチの論争の質的研究の端緒になったという。アメリカでは20世紀初めにThomas and Znaniecki (1918-1920)、Malinowski (1922) のエスノグラフィーやシカゴ学派の影響力が端緒となって社会学で事例研究や記述的方法が中心的方法になったという。その後、質的研究の形式化の試みが盛んになり、Glaser and Strauss (1967) によるグランデッド・セオリー・アプローチが脚光を浴びるようになった⁹。これに続いて象徴的相互作用論やエスノメトロジー、現象学などが提示され、質的研究の結果の記述と評価基準に関する議論がなされる時期やポストモダニズム論の影響を受ける時期を得て発展した。

一方ドイツでは、アメリカの影響を受けながら様々な議論が繰り返されたという。しかし、1970年代頃からschutz (1977) 等が提示したナラティブ・インタビュー、oevermann (1979) による客観的解釈学といった独自の技法が開発され質的研究に影響を与えた。そして、ライフストーリーに関する調査が盛んに進められたほか、質的研究の妥当性や研究結果の一般化効能性について広く議論されるようになった。

質的研究はこのような発展経路をたどったわけだが、その理論的前提は象徴的相互作用論、エスノメソトロジー、構造主義的モデルの3つにまとめられる¹⁰。

象徴的相互作用論を前提とする質的研究は、個人が自分を取り巻く環境や自分の行為に与える主観的な意味に焦点を当てる。これはアメリカの社会学のなかでもプラグマティズムの流れを汲むシカゴ学派によって発達した理論的立場である。特にBlumer (1969) が方法論に大きな影響を及ぼしたとしている。Blumer (1969) は、象徴的相互作用論の基本的前提は次のような3点にあるとしている。①人間は、物事が自分にとって持つ意味にもとづいて行為する。②物事の意味は、その人とその他の人々の間で行われる社会的相互作用から生ずる。③物事の意味は、物事に対処する自分自身との相互作用による解釈課程のなかで取り扱われ、修正される¹¹。

このような基本的前提から象徴的相互作用論的分析では、個人が出来事や経験に対して

意味を付与する仕方を重視する。そして意味を付与する個人の主観的な視点を再構成していく。さらに象徴的相互作用論により分析を進めるには、研究者は研究対象としている人々の視点で研究対象としている人々を取り巻く環境をみるのが前提となり、参与観察やインタビューが用いられる¹²。この象徴的相互作用論から生まれた個人の主観的視点から分析するアプローチが質的研究において主要な位置にある。

エスノメソトロジーはGarfinkel (1967) によって確立されたもので、社会的現実を成り立たせるために人々が実践している方法論に焦点を当てる。このアプローチは人々が相互行為の過程のなかで、どのようにして社会的現実をつくりあげているかを問題にし、社会的現実を成り立たせるために人々が実践している方法論を研究対象にしている。実証研究の際には会話分析を用いるのが特徴である。

エスノメソトロジーの研究的視野は、社会的相互作用に関与している当事者の主観的意味付けには関心は払われず、いかにその相互作用が秩序づけられているか、あるいは社会的現実が形成されるかの記述に限定されている¹³。

Oevermann et al (1979) による客観的解釈学は、構造主義的モデルの代表的アプローチである。その他、構造主義的モデルを前提とするアプローチはいくつかあり、それらの共通点を挙げるとすると、主観的現実、社会的現実を構築するものは文化的システムだと仮定する点にある。構造主義的モデルは表層としての経験や行為と行為の深層構造を区別して捉えている。表層は行為に関連した意図や主観的意味と結びついているため当事者の主観を通して接近可能だが、深層構造は行為を産むものであり、日常の個人的省察からは近づき得ないとみる。構造主義的モデルは、文化や精神的なものを基底とする深層構造を明らかにすることに主眼を置いている。

1.3 方法論の共通性と本質

理論的前提を具体化するためのアプローチが開発されている。象徴的相互作用論を背景としたグラウンデッド・セオリー・アプローチやナラティブ分析、エスノメソトロジーを背景とした会話分析、この他エスノグラフィー、分析的帰納法、ドキュメント分析などが開発されている。ただ、Flick (2007) は理論的前提を異にするアプローチの間にも方法論上の4つの点で共通性があるとしている。

1つめは、認識論的原則として、どの理論的立場でも研究対象の行為や事象を内側から理解するというものである。2つめは、個々の事例を一貫性をもって再構成するというものである。そして個々の事例を比較し一般化を試みる。3つめは、再構成した事例を、事象に関わった人々が作りだした現実としてみるということである。4つめは、事例を再構成したテキストを作成し、このテキストを現象の解釈する基礎とする、という点である。

質的研究は、いくつかの発展経路と異なる理論的背景がある。ただ、方法論上の共通点がある背景は、先にみたように科学的方法論に対する疑問があったと考えられる。例え

ば、社会科学のなかで最も科学的といわれた経済学は、資源が効率的配分にされ経済が最も効率的に運営される状態を示した規範論的性格がある。このなかで消費者は効用最大化するように行動すると仮定され消費者行動が分析される。しかし、消費行動は経済学の仮定からみて不自然な行動もあり、それを解明するには既存理論を用いて行為や事象の表層を分析しても行為や事象の本源には辿り着けない。行為や事象の本源的な要因に辿り着く方法が人の主観を探る質的研究であり、理論的背景を異にしても行為や事象の基にある人の主観的内面を探る方法論に共通性を持ったと考えられる。

2 質的研究の手法

2.1 質的研究の分析の基本的手順とグラデッド・セオリー・アプローチ

どのアプローチでも研究対象とする行為や事象の選定－研究視点の設定－対象の選定－データの収集－データのコーディングと概念化－理論構築という手順が基本になる。概括すると①研究対象を選び仮説や研究視点を設定、②研究対象を観察し、データを収集、③観察やデータをもとに概念構成し理論を構築という手順になる。しかしながら、既存の理論を実証するのではなく、行為や事象の起因になる未知の主観的世界を探るには問題設定－データ収集と分析－理論構築という手順が直線的に進められるわけではない。分析の当初段階ではデータ収集をしながら研究視点を定め、データを眺めて研究視点を練り直すといった作業が繰り返される。それぞれの分析手順が同時並行で進めるということである。問題の構造化、データ収集、データ分析、論文執筆という作業は同時並行で行われるが、初期は問題の構造化とデータ収集に多くの時間を割き、データ分析や執筆は僅かに作業するだけである。作業が進行するにつれ問題の構造化とデータ収集の時間は減り、データ分析と執筆に多くの時間を割いていき論文を完成させる。佐藤（2002）は、このような分析作業の同時並行的進行を漸次構造化法と呼んでいる¹⁴。

理論構築を目指す質的研究において漸次構造化法をとる理由は、行為や事象の内側に潜むものは未知であり、研究対象への観察を繰り返す過程で研究視点や仮説を練り直しながらデータを収集、分析しながら核心に迫っていくからである。Lofland, J and L（1995）は、問題設定、データ、理論的分析のあいだに密接な関係がつけられずに終わっている質的研究を分離エラーと呼んでいるが¹⁵、未知のものに対して研究視点を定め、手順にしたがって分析を直線的に進めても分離エラーを起こす可能性は高い。

基本的には共通した分析手順を持つアプローチのなかでもグラウンテッド・セオリー・アプローチ（Grounded Theory Approach）は、分離エラーを起こさず研究結果の説得性と応用可能性を担保する手法を体系的に提唱し、影響を与えた。

グラウンテッド・セオリー・アプローチは先にみたように、Glaser and Strauss（1967）が提起した質的研究法で、その命名通り観察やインタビューを中心としたデータに密着して理論を構築する帰納法による研究法である。その特徴の1つはコード化にある¹⁶。研究

対象を広く理解し何をコード化すべきかを探るオープンコード化、概念を明確化するための軸足コード化、生み出した概念の証拠と理論的因果関係を明らかにする選択的コード化と進む。コード化の終着点は、これ以上コード化を続けても洞察が見出せない理論的飽和化という状態である。コード化は漸次構造的に進めて概念の精緻化を図る。その際、重要になるのは、その段階ごとに選択した分析対象の継続的比較分析である。

分析対象の選択にも特徴がある。目的志向的な理論的サンプリングを提唱している。限られた研究範囲のなかでデータに密着した深い解釈を加え領域密着型理論を構築するには方法論的限定が重要であると強調している¹⁷。そして限られた研究範囲のなかで研究テーマに適った分析対象の選定、つまり理論的サンプリングを提唱している。これは、研究テーマにそったデータ収集の作業である。実際の分析作業では、データの読み直しを繰り返しながら、研究テーマを絞り込む際に基になったデータ群の他に、研究テーマに適ったデータを追加する作業、もしくは元のデータ群から研究テーマに適ったデータを選ぶ作業である¹⁸。

3 行為や事象の深い洞察のために

3.1 感受概念と参与観察、価値自由

質的研究法を用いた中小企業とその経営者を対象とした研究を基礎に本稿の考察を進める。本稿の考察の基礎とする一連の中小企業研究のテーマは、漸進的進歩を繰り返して時代の潮流に対応しながら経営の維持発展に努めている中小製造業のオーナー経営者の維持発展に対する意思を形成する要因についてである。これらの中小企業研究では、中小企業経営者の内面にある、経営者になる動機、事業に対する気概、自分の労働の意味を明らかにする労働観、会社を経営することの意味を示す事業観、労働観と事業観を昇華させた事業に対する価値観と規範を明らかにし、意思の形成要因を示した¹⁹。本稿の考察の基礎とした中小企業研究の手法はグランデッド・セオリー・アプローチを土台とした²⁰。以下では、質的研究の特性を活かして人の行為や人々が織りなす相互行為から生まれる事象の内側にあるものの深層に迫る方法や技量について考えていく。質的研究の分析過程なかでの研究態度についてはグランデッド・セオリー・アプローチを土台とした研究経験を基に考察を進める。

質的研究は確立された分析手法に従って分析すれば、豊かな成果が得られるというものではなく、相応の技量が必要になる。そのような技量を身に付けるために重要と考えられる点を考えていく。その準備として感受概念と参与観察、Weber（1919）の価値自由についてみることにする。

感受概念は、Blumer（1954）が操作的定義に対置して提唱した概念である。操作的定義とは、客観主義に立つ研究方法のなかで概念定義の混乱を避けるため、数値など測定可能な基準を設けて概念定義を明確にする考え方である。Blumer（1954）は測定可能な概

念は厳密である一方、解釈の幅を狭めてしまう。このような概念を限定概念と呼び、限定概念で社会的現実を眺めても、視野が狭く十分な把握ができないとした。そして、研究の方向性を大まかにつかみ、何を参照すればよいか、何に関連するかの感覚を与える概念として感受概念を提唱した²¹。感受概念は研究者の体験、学習から得た知識など多方面から吸収したもので養われる。

参与観察は、近年よく知られた用語であり、研究対象の人々と活動を共にして人の心情や行動の意味を理解する技法と捉えられている。佐藤（2006）によると1920年代から30年代に人類学やシカゴ学派社会学の研究成果が契機となって広く用いられるようになったという²²。参与観察には研究者と研究対象との関係性において、いくつかの段階がある。Gold（1958）、Junker（1960）は完全なる参加者、観察者としての参加者、参加者としての観察者、完全なる観察者という4段階に分けて研究者と研究対象との間の関係性についての理念型を示している。最も関係が強い、もしくは深いのが完全なる参加者であり、この場合、研究対象は研究者を自分たちの一員とみなし観察者とは思っていない。次の観察者としての参加者は、研究対象は研究者が観察者として、その場にいることを知っている状態である。研究者は活動を共にする、活動を直接観察する、インタビューをするといったことを行う。参加者としての観察者は一度だけ研究対象の現場に訪れ、インタビューや観察をするというものである。最も関係が浅いのが完全なる観察者で研究者は研究対象とは接触を持たず、遠くから研究対象の行動を観察する。研究対象の内側をどこまで洞察するかは、研究対象との関係性に左右される。長期間にわたって研究対象を観察する場合、その時々で関係性は両極の間を揺れ動くこともある。

社会的現実には研究者の主観的な価値理念を基にした研究者自身の観点や関心を前提としないかぎり概念や因果関係を構成できない。研究者は認識前提において価値への自由でなければならないというWeber（1919）の主張は冒頭でみたとおりである。この主張には続きがあり、研究者の主観的な価値理念に誠実な認識をするためには、研究過程では、その価値理念から自由になることで、認識に整合的で価値から自由な客観的認識に到達していると述べている。グラウンデッド・セオリー・アプローチによって分析する場合においても価値からの自由という姿勢はコード化の過程では重要な姿勢だと考えられる。

3.2 テーマ設定と質的研究に求められる態度

質的研究に対する評価は、分析結果に加え、分析方法の選択が適切性とその方法にそった分析過程が明確であったかどうか問われる。高い評価を得るには、それぞれの質的研究のアプローチが持つ特性と分析技法に対する理解も必要になる。

例えば、グラウンデッド・セオリー・アプローチの特性を理解し分析手順に従って分析すれば、一定レベルの研究成果が得られる可能性がある。この点がグラウンデッド・セオリー・アプローチを広める理由であった。しかし、分析方法に従って分析を進めたからといって、必ずしも深い解釈が可能となるわけではない。深い解釈をするには、研究に対す

る姿勢を明確にする、データ収集、データとの対話における技量を身に付ける必要がある。相応の能力を養うのも重要である。

まず、研究に対する姿勢の明確についてである。これは研究者自身が何のために研究し、研究によって何を明らかにしたいのか、終始一貫した姿勢を持つということである。その理由は2つある。1つは、分析が便宜的、あるいは要件満たしにならないためには、分析過程を通して考察や選択を繰り返すなかで判断基準に振れがないように研究の目的や問い、地に足が着いた認識を持つ必要がある。もう1つは、地に足が着いた姿勢は、データ収集など様々な場面での協力者、分析対象者、また研究成果を応用する実践者から信用もしくは信頼を得る契機となる。主観的意味を解釈するという点からは、とりわけ分析対象者からの信頼は重要で、分析対象者が自分自身の内面をどの程度表出してくれるかどうかは、分析対象者の研究者に対する信頼の程度に左右される。分析対象者や協力者との関係から研究姿勢について付け加えると、研究の基本的な目的や問いが分析対象者や協力者にとって説得的、あるいは共感が持てるものであると、分析対象者やデータへの接近が容易になることもある²³。

なお、ここで取り上げた研究の目的、問いは具体的な研究視点というものではなく、研究活動の基礎となるものを示している。本稿の検討の基になっている中小企業研究からみると、漸進的革新を繰り返す中小製造業は経済発展にとって意義ある存在である、この意義ある中小企業の支援、具体的には中小企業振興への応用、中小企業経営者が意欲を高める糧となることが目的であり、中小企業を意義ある存在へと導く要因は何か問いである。

3.3 分析範囲の設定

質的研究は、同じ特質や特徴を持つ人々や集団、ある特定の事象といった社会のある限られた範囲の事象の根底にあるものを探る。社会全体を横断する大理論を構築するものではない。言い換えると、観察し深い解釈を加えられる人々や集団、事象の範囲は限られるということである。グランデット・セオリー・アプローチにそくしてみると、理論的飽和化に至るために継続的比較分析が可能な範囲を分析対象にするということになる。ただ、限られた人々や集団、事象と密接に関わることで人々の行為や人々が織りなす事象の要因の深い解釈が可能になる。研究成果の現場での応用可能性も広げるということでもある。

分析対象の範囲を定める際に、上にみた研究の問いを具体的な研究視点に絞り込めれば望ましい。しかし、的確な研究視点を定められていない場合も多い。研究の問いに従って分析対象となる可能性のある人々や事象に接しながら、研究視点を探っていくことになる。この研究範囲の設定が具体的分析の入口とも捉えられる。先にもみたとおり、漸次構造化が質的研究の特性であり、データ収集や分析、理論構築と同時並行的に試行錯誤を繰り返しながら研究視点を定めていく。研究を動機づける問いを持ち、研究視点を定める際に、寸分違わずとはいかなくとも、的を射た方向に導いてくれるのが感受概念である。次

の節では、具体的な分析過程において重要だと考える点を経験を踏まえて、経験についての記述を交えながら整理する。

3.4 分析過程の重要点

3.4.1 感受概念の形成

中小企業とその経営者と接する端緒は、民間シンクタンクで国や地方自治体から地域経済振興に関わる委託調査研究に従事したときである。工業集積地域を担当する 경우가多く、それぞれの地域の製造業の中小企業と接する機会が多くなった。元々、産業や中小企業を専門に勉強したわけではなく、中小企業への理解もなく地域経済の実態を調査し振興施策を立案していた。その当時は、中小企業の存在を肯定的に捉える見解があったものの、全般的には明治期以降の中小企業を経済発展の阻害要因と捉える見解が大勢であり、それに迎合した見方をしていた。

しかし、立案した振興施策を具体化する段階になると中小企業の工場に足を踏み入れ、経営者と直接接する機会が増えた。これが中小企業に対する見方を徐々に変え中小企業を勉強する契機になり、中小企業は必ずしも問題性のある存在ではなく、機械工業の国際競争力の一翼を担ったのは中小企業の漸進的進歩だという考えを持つようになった。例えば、日本の代表的な自動車産業を取り上げると、自動車は2～4万点の部品で構成され様々な技術が複合して完成する。日本の自動車産業が高性能、高品質を実現し競争力を持ったのは、部品供給を担う中小企業の技能や技術の進歩も必要である。

この段階では中小企業を表層で捉えただけであったが、中小企業経営者の内面を探る研究をするうえでの感受概念を形成につながった。感受概念は中小企業の現場や研究からだけで養われるのではなく、自分の職業経験など中小企業とは直接関わりのない経験や知識によっても涵養される。厚みのある感受概念を持ち、研究対象が定まったら自分の持つ知識や経験を総動員して、なぜそのような行為や事象が生まれるのかを類推し、研究の方向性を定めることが重要である。

3.4.2 参与観察

漸進的進歩に努める中小製造業のオーナー経営者を研究対象に、事業の維持発展への形成要因と研究テーマを定めて参与観察を始めた。具体的なサンプルは委託調査研究などを通し付き合いを続けていた経営者達、継続的に観察を続けている中小企業の経営者達であった。この頃になると産業支援型NPO法人を設立し中小企業の経営課題の解決を支援する他、サンプルになった中小企業経営者とともに様々なプロジェクトを推進しプロジェクトに関連した会社の経営といった活動をするようになっていた。このような活動の最中も参与観察の一環であったが、先にみた関係性からみると、完全なる参加者という立場であった。実際、プロジェクトを進めているときは観察するという意識はなくプロジェクトに没頭した。後になってその時のことをふり返りつつ観察者としての参加者、あるいは参

加者としての観察者という立場でインタビューなどをするというスタイルの調査が続いた。これは経営課題の解決や支援で出会った中小企業経営者の場合も同様であった。経営者の性格などにもよるのだが、研究対象者が研究者を観察者とみなしていない状況では、研究対象の本音、飾らない姿が顕れる場合も多い。経営者の内面を観るにはよい機会を得た。

参与観察は、研究対象の人々と活動を共にして人の心情や行動の意味を理解するには有効な技法である。それだけに慎重に進める必要がある。特に根拠のない予断、他を顧みない価値判断を持って臨むことは避け、感受性を高めて臨むことが必要である。

研究対象者の心情や行動の意味を解釈するという点から考えると、研究対象者に接することだけが参与観察ではないかと考えている。本稿にそくしてみると、中小企業経営者と同様の体験をすると、中小企業経営者の内面に加速的に近付け、心情や行動の意味の解釈への予断を消すことにもつながった。この点は感受概念の涵養にもつながると考えられる。

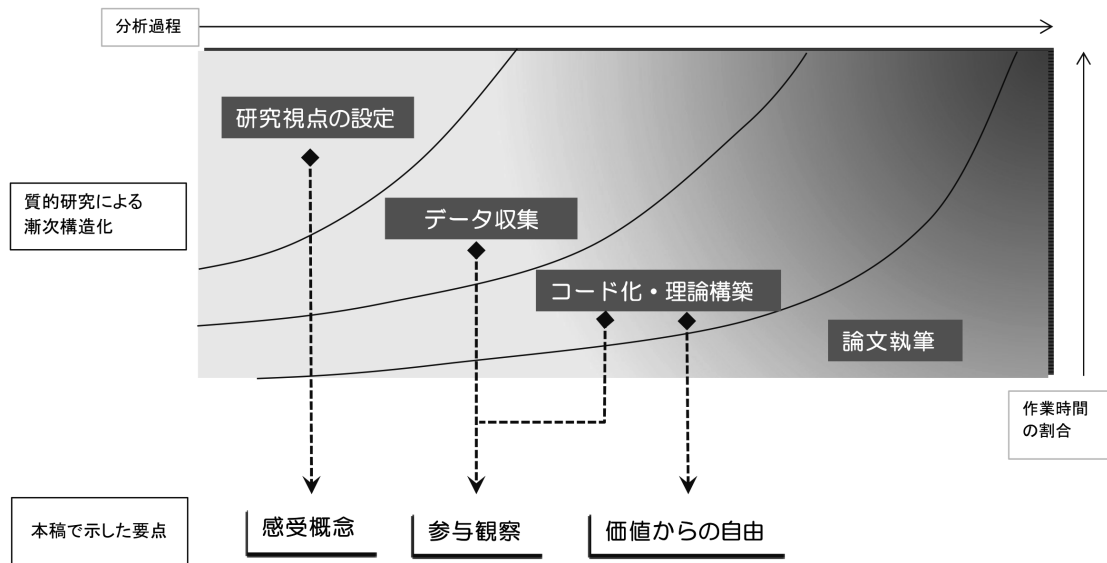
参与観察にあたってもう1つ重要な点は、先にみたように、研究の基本的目的と問いを分析対象者に理解してもらう姿勢が大切である。そのような態度が研究者と分析対象者との間の信頼の醸成になり、分析対象者の内面の深層に近づける状況をつくりだす。

3.4.3 データ収集とコード化

コード化は概念と理論を生成する質的研究の分析作業のなかでも大変重要な作業になる。本稿の考察の基にしている中小企業経営者の研究では、グラウンテッド・セオリー・アプローチを土台にコード化を進めた。先にみたようにグラウンデッド・セオリー・アプローチは主にコード化の方法を軸に分化、拡散していくもののコード化の手法が示されている。このなかには観察やインタビューから得た言葉や語りが主要なデータなり、データを単語のレベルに切片化するのを推奨する主張もある。本稿で紹介している研究では、文脈のなかで中小企業経営者の言葉や語りの要点の解釈に努めた。それは、中小企業の経営は連綿と続いており、経営者は経営の変遷や生い立ちを基に、様々な社会関係と照し合せて自分自身を語っており、経営の変遷を知り、その文脈のなかで語りを捉えないと解釈ができないからである。経営の変遷を知るという点から、その企業の歴史を知ることによって有用な機械設備、製作品、また創業者や先代の書き残した冊子などもデータとして収集した。データの種類は1つではなく、研究対象の特性に応じて適切なものがあると考えられる。

コード化の作業は、作業を同時並行的に進めた。オープンコード化に多くの時間を割く初期の段階では、人となりをよく知り内面に入りやすい長期間にわたり参与観察をした経営者をサンプルにしコード化を試みた。試行錯誤が次第に収束し軸足コード化、選択コード化に多くの時間を割く、中期から終期にかけてサンプルを拡げ、出来上がりつつあった概念の適用可能性も探りながら観察やインタビューを続け、新しい洞察が生まれないと考えられる時点でコード化作業を終えた。

図1 質的研究の分析過程での重要点



(出所) 筆者作成。質的研究による漸次構造化の部分は佐藤（2006）p.195を参照し作成。

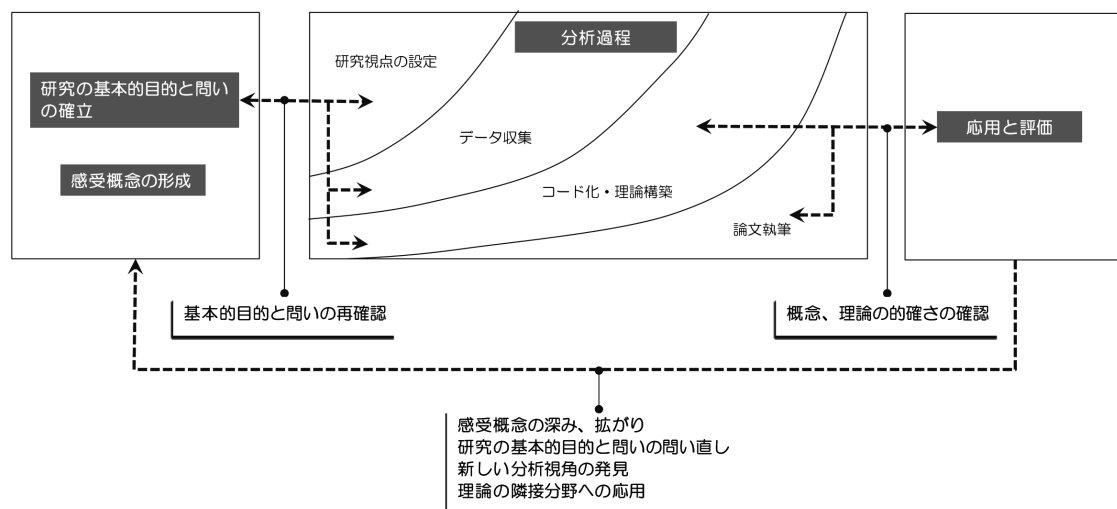
質的研究の経験を通じてコード化を進めるうえで重要と考える点は、参与観察でもみたように予断や価値判断を持ってコード化をすると、人の内面や人々の相互作用がつくりだす事象の内側を洞察する目を曇らせ、適切な解釈を妨げる。研究テーマや研究視点を定めるときにはWeber（1919）の価値への自由が必要だが分析をする際には価値からの自由という姿勢が重要だと考えられる。

3.5 さらなる研究能力の向上のために

ここまで、研究視点を明確化するところから理論構築に至るまでを質的研究による分析過程と捉えて検討してきた。ただ、深い解釈が可能になるには、具体的な分析に入る以前の段階、研究者自身の立場を明らかにする研究目的と研究の基本的問いを持つ時期も重要になる。この時期は感受概念を育む時期である。関心のある分野について学習と思考を続け、また様々な経験を積み、試行錯誤を繰り返して漸次構造的に研究目的と問いを創る。そして、感受概念を豊かにする。

関心をもった分野の研究、もしくは質的研究を続けようとする場合、理論構築し論文を発表した後、研究成果が現場の実践者や分析対象者による評価も質的研究能力を高める大切な要素となる。例えば、本稿の検討の基にした中小企業の研究でみると、自治体の産業振興担当者などによる施策への応用から下す評価、中小企業のオーナー経営者の納得の度合いが研究成果の評価になる。それとともに新しい分析視角や理論の隣接分野への適用に対する示唆を与えられる。研究の基本的目的と問いの再確認、感受概念を深める、あるいは広げる契機ともなる。このように捉えてみると、研究視点の設定から理論構築に至る分析過程に加え、その前後にある研究の基本的目的と問いの確立、応用と評価の過程も質的研

図2 広義の質的研究での相互関係



(出所) 筆者作成。ただし、分析過程の部分は佐藤（2006）p.195を参照し作成。

究の一環とみることもできるのではないか。本稿では、分析過程の前段階と後段階を含めて、仮に広義の質的研究と捉える。

研究の基本的目的と問いの確立－分析過程－応用と評価という広義の質的研究のなかでも漸次構造化の過程がある。特に研究視点を固める分析過程の初期には、データとの対話によって研究視点を固めるといった作業とともに研究の基本的目的と問いの再認識、感受概念を問い直すといった作業を繰り返した経験がある。この作業によって研究の基本的目的と問いをより確固としたものにし、地に足を着けて以後の分析を続ける基盤を手に入れた。分析過程に入りコード化や理論構築に多くの時間を割く段階に入ると、生成した概念や理論が実践者にとって説得的なものか、分析対象者の納得を得られるものであるかどうかを視野に入れるようになった。そして、生成途上の概念を自治体の産業振興担当者や中小企業のオーナー経営者との対話のなかで理解度を確認するといった作業をし、概念を再検討した経験がある。

広義の質的研究のこのような過程による研究成果の応用、研究成果に対する評価が新しい分析視角、理論の隣接分野への適用に対する示唆をもたらす。研究の基本的目的と問いの再確認、感受概念を深める、あるいは拡げる契機となることは上にみたとおりである。

おわりに

以上、人の主観的な意味世界を解釈する質的研究がなぜ必要とされ、発達するなかで様々な認識論や方法論が提示されてきたのか、質的研究の発展を追いながら質的研究の本質的内容の概略をみてきた。そして、人々の行為や人々が織りなす事象の起因となる主観的意味の深い解釈という視点から、分析過程における重要点、質的研究の能力を養うのに

役立つと考えられる点を、中小企業とその経営者を研究した経験をもとに考察した。分析過程で重要になるのは、感受概念を用いて研究の方向性を定めること、データ収集の要となる参与観察では研究の基本的目的と問いを明確にし感受性を豊かにして予断を持たず分析対象者に接すること、コード化・理論構築では予断や価値判断に阻まれないで価値からの自由という姿勢が重要であることを指摘した。本稿では具体的な質的研究による分析過程の前段階と後段階を含めて広義の質的研究と捉えた。研究の基本的目的と問いと感受概念を形成する段階を前段階、研究成果の応用と評価を受ける段階を後段階とした。分析過程と前段階の間、後段階の間は相互依存的な関係にあるのを意識し、分析の過程で前段階に立ち返り研究の基本的目的と問いを再確認する、分析途上であっても後段階に進み概念や理論的的確さを確認することで研究成果を質の向上に繋がる。また、応用と評価の前段階へのフィードバックは感受概念の深みと広がり、揺るぎない研究の基本的目的と問い確立につながり、質的研究の能力を高める可能性がある点を指摘した。

本稿は、質的研究を用いて日の浅い人たちも視野に入れ検討を進めた。ただ、本稿は質的研究の一部分を論じたにすぎない。質的研究の成果の評価は分析結果とともに分析方法の選択が適切であるか、その方法にそった分析過程が明確であったかどうかとも問われる。質的研究は広がりや深みがあり、研究成果に高い評価を得るには、多様なアプローチを内容に対する理解、分析手法に対する理解が必要になる。人と密着して理論構築を目指すのが質的研究である。質的研究を有効に使いこなすには人の心情を汲みとる技を身に付けるのも重要である。

【注】

- ¹ シンクタンクでの委託研究調査、行政機関や産業支援機関の支援事業、個人研究などを通して中小企業の調査を始めたのは1989年からである。後の3章1節でみるGold (1958)、Junker (1960) による参与観察の定義を基に完全なる参加者、観察者としての参加者として調査した中小企業を参与観察の対象とすると、製造業に限ってみると約300社を参与観察している。インタビューや観察しただけの中小企業を含めると約1200社を調査している。なお、調査で知り得たことには秘匿すべき事柄も多くあるため本稿では観察した中小企業の社名や経営者の個人名は記述しない。調査数も概数で示す。
- ² 一人の個人は、いくつもの立場や社会関係を持っている。研究の目的によって特定の個人をどの側面から観るかは異なってくるが、どの側面からアプローチしても、その個人の主観的意味世界を探ることに違いはない。そのため特定の個人を経営者という立場に注目しアプローチした経験を基にした本稿の考察は、人の主観を探る質的研究全般に应用できると考えられる。
- ³ Bons and hartmann (1985) は従来の科学的方法による研究成果は実社会で活かされる場面がきわめて狭いとした。研究方法の基準を満たそうとするあまり、日常生活で意味のある問題からかけ離れた研究になってしまっている。さらに、実際の研究の場面では、研究者の利害関係や社会文化関係が研究とその結果に影響しており、研究の設問や仮説、データの解釈にも影響しているとする。客観主義の呪縛を解くと客観的に正しい命題を無批判に受け入れることはできない。人の主観や主体性と状況に結びつきのある主張をすることが社会学的な知の裏づけけるとする。

- ⁴ Beck and Bons (1989) p.31。
- ⁵ Bons and hartmann (1985) p.21。
- ⁶ Flick (2007) p.17。
- ⁷ Flick (2007) pp.556-559。この他、カルチャル・スタディズ、ナラティブ分析、バイオグラフィー分析、ジェンダー研究、現象学、生活世界分析を挙げている。
- ⁸ Flick (2007) pp.20-27を参照。
- ⁹ その後、Strauss (1986)、Strauss and Corbin (1990) をはじめグランデット・セオリー・アプローチは分化していく。Strauss (1987)、Strauss and Corbin (1990の他)、Glaser (1978)、Charmaz (2006) などが代表的である。日本では木下 (1999)、戈木・クレイグヒル茂子 (2013) などがある。グラウンデッド・セオリー・アプローチの分化、それぞれのコード化を中心とした方法論、認識論の相違は例えば、木下 (2013) に詳しい。
- ¹⁰ Flick (2007) pp.67-81を参照。
- ¹¹ Blumer (1969) p 2。
- ¹² Blumer (1969) は、このような根拠として「ある行為を理解するためには、その行為者が定義するプロセスの内部に入らなければならない」という象徴的相互作用論の仮定を挙げている (p16)。
- ¹³ Flick (1995) は、エスノメソロジーの系譜のなかで、社会科学の分野ではGarfinkel (1986) や Livingston (1986) など、「仕事の研究」といわれる仕事や作業の過程分析に関心を注ぐ研究が現れたとしている。社会心理学ではEdwards and potter (1992)、Potter and Wetherell (1998)、Middleton and Edwards (1990) などにより、社会的相互作用上のコミュニケーションや構築のプロセスの解明に重点を置く「談話心理学」が発展したとしている。いずれも関心は、主観的意味付けではなく、相互作用が秩序づけられているか、社会的現実が形成されるかにあるとしている。また、Garz (1994) は客観的解釈主義はテキストと現実世界が同一視していると批判しているとしている。
- ¹⁴ 佐藤 (2002) pp.293-295。
- ¹⁵ Lofland, J and L (1995) は、分離エラーのある研究について次のように記述している。「ある社会ユニットそれに関する問題関心についての、興味深くかつよく整理された分析がみられるのに対して、真ん中の部分を見ると、その分析のパートで提起されている理論的考察とほとんど関係のない、低レベルでごく常識的な記述で終わっている、というような例である。このような場合、理論的分析の部分は、実際のデータをふまえて議論が展開されているのではなく、データのわきに分析結果が無理矢理くっつけられているのである。報告書の全編を通してデータと分析がうまくかみ合っていないために、両者の関係はきわめてあいまいなものにとどまっている」(p146)。
- ¹⁶ その後、グランデット・セオリー・アプローチは認識論、コード化の手法に改良が加えられるとともに、分化、拡散する。
- ¹⁷ Glaser (1978)。
- ¹⁸ 木下 (1999) は、理論的サンプリングが滞った場合、継続的比較分析が「継続的という時間的特性と同時に、類似性と差異性の最大化という特性がある」とし、「最初になんらかの解釈さえあれば、それと類似したものや対極的なものを選び出すのは容易である」としている。そして「類似性を中心に進めれば、類似性の部分がかたまりとなるから共通特性、すなわち、概念候補をつかみやすい」、「対極例を考えれば、なぜそれらに対極例と比較しようとするのか、ということから自分の解釈をはっきりさせやすい」という点から理論的サンプリングを左右するものとして指摘している (p263)。
- ¹⁹ 本稿の考察の基礎とした中小企業研究の詳細は、例えば里見 (2018a)、里見 (2018b) を参照されたい。
- ²⁰ 以前からグランデット・セオリー・アプローチに準じた方法を採用していた。本稿の検討の基にした研究では分析過程を明示するため木下 (1999) が提唱した修正版に準じた手法を活用した。
- ²¹ この感受概念は、Glaser and Strauss (1967)、Glaser (1970) といったグラウンデッド・セオリー・アプローチの提唱者も重要視している。
- ²² 佐藤 (2006) pp.25-26。

- ²³ 研究の基本的目的や問いは、研究対象の集団や事象を肯定するものだけではない。否定的な場合もあり得る。この場合は分析対象者の理解、共感を得るのは難しいと推測される。

【参考文献】

- 1 木下康仁 (1999) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチ 質的実証研究の再生』 弘文堂。
- 2 木下康仁 (2003) 『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い』 弘文堂。
- 3 木下康仁 (2014) 『グラウンデッド・セオリー論』 弘文堂。
- 4 佐藤郁哉 (2002) 『フィールドワークの技法 問いを育てる、仮説をきたえる』 新曜社。
- 5 佐藤郁哉 (2006) 『フィールドワーク増訂版 書を持って街へ出よう』 新曜社。
- 6 里見泰啓 (2018a) 「中小製造業における家業の維持発展への意思の形成要因」 (博士学位申請論文) 早稲田大学。
- 7 里見泰啓 (2018b) 「中小企業経営者の企業家精神」 鶴飼信一編著『日本社会に生きる中小企業』 8章所収 中央経済社。
- 8 戈木クレイグヒル茂子編 (2013) 『質的研究方法ゼミナール: グラウンデッド・セオリー・アプローチを学ぶ』 第二版 医学書院。
- 9 箕浦康子 (1999) 『フィールドワークの技法と実際 マイクロ・エスノグラフィー入門』 ミネルヴァ書房。
- 10 Beck, U. and Bons, W. (eds), (1989) *Weder Sozialtechnologie noch Aufklärung? Analysen zur Verwendung Sozialwissenschaftlichen Wissens*. Suhrkamp.
- 11 Bergmann, J.R. (1980), *Interaktion und Exploration: Eine Konversationsanalytische Studie zur sozialen Organisation der Eröffnungsphase von psychiatrischen Aufnahmegesprächen*. Dissertation.
- 12 Blumer, H.G. (1954) "What is Wrong with Social Theory?" *American Social Review*, 19 pp 3 -10.
- 13 Blumer, H.G. (1969) *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, Prentice Hall (後藤将之訳『シンボリック相互作用論 パースペクティブと方法』 1991年 勁草書房)。
- 14 Bons, W. and Hartmann, H. (eds), (1985) *Entzauberte Wissenschaft: Zur Realität und Geltung soziologischer*, Göttingen.
- 15 Charmaz, K. (2006) *Constructing Grounded Theory: A Practical Guide Through Qualitative Analysis*. Sage (抱井尚子 末田清子監訳『グラウンデッド・セオリーの構築 社会構成主義からの挑戦』 2008年 ナカニシヤ出版)。
- 16 Denzin, N. and Lincoln, Y.S. (eds), (2000) *Handbook of Qualitative Research 2nd edn*. Sage (平山満義監訳 岡野一郎 古賀正義編訳『質的研究ハンドブック』 全3巻 2006年 北大路書房)。
- 17 Edwards, D. and Potter, J. (1992) *Discursive Psychology*. Sage.
- 18 Flick, V. U. (1995) *Qualitative Forschung*, Roeholt Taschenbuch Verlag GmbH (小田博志 山本則子 春日常 宮地尚子訳『質的研究入門 人間の科学のための方法論』 2002年 春秋社)。
- 19 Flick, von. Uew. (2007) *Qualitative Sozialforschung*, Roeholt Taschenbuch Verlag GmbH (小田博志 山本則子 春日常 宮地尚子訳『新版質的研究入門 人間の科学のための方法論』 2011年 春秋社)。
- 20 Garfinkle, H. (1986), *Ethnomethodology Studies of Works*, Routledge & Kegan Paul.
- 21 Garz, D. (eds), (1994) *Die Welt als Text*. Suhrkamp pp.7-21.
- 22 Glaser, B. (1978) *Theoretical Sensitivity: Advances in Methodology of Grounded Theory*, The Sociology Press.
- 23 Glaser, B. (1992) *Basic of Theoretical Analysis: Emergence vs. Forcing*, The Sociology Press.
- 24 Glaser, B. & Strauss, A. (1965) *Awareness of dying*, Aldine Publishing Company (木下康仁訳『死のアンテナ理論と看護: 死の認識と終末期』 1988年 医学書院)。
- 25 Glaser, B. & Strauss, A. (1967) *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*. Aldine Publishing Company, New York (後藤隆 大出春江 水野節夫訳『データ対話型理論の発見』 1996年 新曜社)。

- 26 Gold, J. (1958) *Roles in Sociological Field Observation*, The Sociology Press.
- 27 JunKer, A. (1960) *Field Work*, The Sociology Press.
- 28 Livingston, E. (1986) *The Ethnomethodological Foundations of Mathematics*. Routledge & Kegan Paul.
- 29 Lofland, J. and Lofland, L. (1995) *Analyzing social setting*, international Thomson Publishing: Wadsworth (進藤雄三 宝月誠訳『社会状況の分析－質的観察と分析の方法－』1997年 恒星社厚生閣)。
- 30 Malinowski, B. K. (1922) *Argonauts of the Western Pacific: An account of native enterprise and adventure in the Archipelagoes of Melanesian New Guinea*, (増田義郎訳『西太平洋の遠洋航海者』講談社学術文庫)。
- 31 Middleton, D. and Edwards, D. (eds), (1990) *Collective Remembering*. Sage.
- 32 Punch, K.F. (1998), *Introduction to Social Research: Quantitative & Qualitative Approaches*. (川合隆男訳『社会調査入門－量的調査と質的調査の活用－』2005年 慶應義塾大学出版会)。
- 33 Strauss, A. (1987) *Qualitative Analysis for Social Scientists*, Cambridge University Press.
- 34 Strauss, A. and corbin, J. (1990) *Basics of Qualitative Research: Grounded Theory Procedures and Techniques*, Sage Publications (南裕子監訳『質的研究の基礎：グラウンデッド・セオリーの技法と手順』1999年 医学書院)。
- 35 Strauss, A. (1998) *Basics of Qualitative Research: Procedures and Techniques for Developing Grounded Theory, 2^{ed} edition* Sage Publications (操花子・森岡崇訳『質的研究の基礎：グラウンデッド・セオリー開発の技法と手順』2004年 医学書院)。
- 36 Thomas, W. I. and Znaniecki, F. (1918-1920) *The Polish Peasant in Europe and America*, University of Chicago Press (桜井厚訳『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』1983年 御茶の水書房)。
- 37 Weber, M. (1917) *Science as a Vocation*, (尾高邦雄訳『職業としての学問』1977年 岩波文庫)。